

情動認識力, エモーショナル・インテリジェンス, 共感性の因果モデルによる検討

立教大学文学部 酒井久実代

A study of the causal model of self-awareness of emotions, Emotional Intelligence, and empathy

Kumiyo Sakai (Rikkyo University)

Three tests were administered to 143 female university students to measure self-awareness of emotions(AE), Emotional Intelligence(EI), and empathy(EMP). AE was measured by the AE test in which the subjects described their emotions in words, EI was measured by the EI scale, and EMP was measured by the PT-EC scale. The reliability coefficients of these tests were acceptable. Cognition of emotions(CE) and processing of emotions(PE) factors were found on the EI scale, and perspective taking and empathic concern factors were found on the PT-EC scale. The covariance structure analysis showed that AE had a significant effect on PE, and CE and PE had significant effects on EMP. Further research is necessary for testing the convergent-discriminant validation of EI construct composed of CE and PE.

Key words : self-awareness of emotions, Emotional Intelligence, empathy

問 題

エモーショナル・インテリジェンス (Emotional Intelligence) は, Salovey & Mayer(1990)によって導入され, Goleman(1995)によって広く知られるようになった概念である。日本では一般的にはEQという言葉でIQと対比させて紹介されたが, エモーショナル・インテリジェンス概念の中には指数という意味は全くない。IQのように一つの数値によってその能力を表そうとしているわけでもない。EQという言葉は, 日常的な用語としては使用されているが, 心理学的構成概念を表す言葉としては不適切であるので, 本論文ではもとの論文に即してエモーショナル・インテリジェンスまたは略してEIという用語を使用する。

Salovey & Mayer(1990)によれば, EIには情動の評価と表現, 情動の制御, 情動の利用の3つの側面があり, 各側面はまたいくつかの要素からなっている。

情動の評価と表現とは自他の情動を正確に認知

し, 言語化するなどの表現をすることを指している。自己の情動に関するものと他者の情動に関するものに分かれており, 他者の情動の評価と表現は, 共感性であると位置づけられている。

情動の制御とは自他の情動を効果的に制御することで, 自己と他者に分かれている。自己の情動の制御とは, ネガティブな情動を避けて, ポジティブな情動を維持することを指している。他者の情動の制御とは, 他者の感情的反応を制御し, 変えることを指している。

情動の利用とは様々な生活上の課題に対し動機づけを持ち, 計画を立て, 達成するために情動を利用することを指している。情動の自由さ(emotion swings, mood swings)が大きい, すなわち認知される情動の幅が大きく多様に变化する場合には, 柔軟な計画, 多様な可能性を考えることができるという。また, ポジティブな情動を利用して課題に持続的に挑戦するよう動機づけることも含まれている。情動の利用の中には, 柔軟な計画性, 創造的思考, 注意の再方向づけ, 動機づけの

4つの要素がある。

このようにSalovey & Mayer(1990)のEI概念は多くの構成概念を含んでおり、それらをまとめた一つの概念としての有効性に疑問も投げかけられている。

Sternberg & Kaufman(1998)は1990年代の知能に関する文献をレビューした中で、最後の項目としてEIを取り上げ、“その概念の存在を示すいくつかの証拠はあるが、十分な収束的・弁別的妥当性の検証が必要であろう”と結論づけている。

Davies, Stankov, & Roberts(1998)はEI概念の妥当性を検証するため、延べ530名の被験者に対し、EIの自己報告式テスト・客観的テスト、認知能力テスト(流動性知能テスト・結晶性知能テスト)、パーソナリティ・テストを実施し、いくつかの否定的な結果を見いだしている。たとえば、EIの自己報告式テスト「特性メタムード尺度(Trait Meta-Mood Scale)」は信頼性はあるが語彙力以外の他の認知能力テストとは相関がなく、Mayer, Dipaolo, & Salovey(1990)によるEIの客観的テスト「情動知覚テスト(Emotion perception test)」とも相関がなかった。そしてパーソナリティ・テストの神経症傾向との相関は高く、因子分析により両者は識別できなかった。また「情動知覚テスト」の信頼性は低く、認知能力テスト、パーソナリティ・テストとも無相関であった。これらの結果からDavies et al.(1998)は、EI概念の妥当性を検証できなかったと結論づけている。

たしかにDavies et al.(1998)が使用したテストは信頼性・妥当性があるものとは言えなかったが、認知能力テストとの相関がなかったことで、妥当性がないとすることはできないと思われる。なぜならEIは、従来の知能テストで測定される知能とは異なる知的能力として概念化されたものだからである。また使用されたテストは、EI概念のすべての側面を測定するためのものではなく、主に情動の評価と表現を測定するものであったので、不十分な検証だと思われる。

本研究では、上記の研究では用いられなかったSchutte, Malouff, Hall, Haggerty, Cooper,

Golden, and Dornheim(1998)の「エモーショナル・インテリジェンス尺度」を使用する。本尺度はSalovey & Mayer(1990)の概念に基づいて作成された質問紙尺度で、高い信頼性が得られている。また概念的に関連のある構成概念、たとえば感情への注目、感情の明晰さなどと相関関係が見られ、クライアントよりもセラピスト、男性よりも女性において得点が高く、ビッグファイブの経験への開放性因子と関連があるなどの結果が得られている。これらの結果は「エモーショナル・インテリジェンス尺度」の妥当性を支持していると言えよう。

Goleman(1995)は、多くの構成要素をもつEIの根幹(key stone)となる能力を情動の自己認識力(knowing one's emotion: Self-Awareness)と名づけている。これは“現在進行中の自己の心的状態を認識する”能力であり、自己の情動を識別し、それにラベルをつけることと考えられている。この情動の自己認識力と同様に、情動を認識する能力の個人差に焦点を当てた概念の一つにGardner(1983)のイントラ・パーソナル・インテリジェンス(intra-personal intelligence)がある。Gardnerは感情を象徴化することにより、より複雑で分化した感情を認識することができると考えている。またGendlin(1962)の体験過程(experiencing)理論も、感情の流れ(the flow of the feeling)を象徴化することにより、感情の意味が創造されるとする点で共通している。Gendlin, Beebe, Casens, Klein, & Oberlander(1968)は、感情過程を象徴化する能力と創造性との間に関連があることを示している。Lane & Schwartz(1987)は、情動の組織化の程度は情動の言語的な表象に反映されると考え、情動の認識力(Emotional Awareness)の認知的発達段階を示した。その最高水準では、より複雑で分化した感情状態(complex and highly differentiated sets of feelings)を記述することができ、感情の質や強さをより分化して認識することができるとしている。

これらの研究で取り上げられている諸概念は、自己の情動を認識することに焦点を当てている点

で共通している。また、情動を認識するためには情動にラベルをつけること、情動を象徴化すること、あるいは言語で表現することが必要であるとすると一致している。本研究では、これらの諸概念に共通する自己の情動を認識する能力を情動認識力とし、「自己の情動の言語化」という指標を用いて測定する。

Goleman (1995)によれば、情動認識力はEIの根幹となる能力であるから、情動認識力はEIを規定することになる。またSalovey & Mayer (1990)によれば、共感性はEIの構成要素の一つであるから、EIは共感性を規定することになる。本研究では、情動認識力、EI、共感性を測定し、これらの間に想定される因果関係を共分散構造分析により検討しようと思う。

方 法

対象者・手続き

東京近郊の大学生女子143名に、授業時間中に集団で調査を実施した。実施に要した時間はおよそ30分間であった。

テスト内容

①情動認識力(self-awareness of emotions¹⁾: AE)

情動認識力を“情動を言語化することにより、多様な感情を認知する能力”と定義した。たとえばある人に対する自己の感情について考えてみると、たった一つということはありません。その人と様々なやりとりがあればあるほど、あるいはその人との関係が深ければ深いほど、様々な感情を経験するはずである。感情を経験することと、その感情を認知することは異なった現象である(イザード, 1996)が、ここでは言語化することによって多様な感情または情動を認知する能力を測定する。

¹⁾ 情動は感情と感情にともなう身体的運動変化、自律神経変化、心理変化のすべてを包含する心理過程であり、感情は情動過程のうち内的に経験される主観的な心理過程(山鳥, 1994)とされている。本研究では情動の主観的経験に焦点を当てているところでは、感情という用語を使用する。

問題1では、A子さんとB君という二人の登場人物の関係を表す短い文章(付録1参照)が提示される。被験者は文章を読んだ後、二人の登場人物の気持ちを想像して「○○な気持ち」という形式で記述する。できるだけ十分に二人の気持ちを表現できるように書くことを求められる。制限時間は、項目1. A子さんの気持ち、項目2. B君の気持ちの記述の2項目に対して、5分間とした。

問題2では、被験者自身の好きな人と嫌いな人を一人ずつ思い浮かべ、そのとき感じられる気持ちを「○○な感じ」という形式で記述する。できるだけ十分に自分の気持ちを表現できるように書くことを求められる。制限時間は、項目3. 好きな人に対する気持ち、項目4. 嫌いな人に対する気持ちの記述の2項目に対して、5分間とした。

言語化された気持ちの数を得点とした。多くの気持ちが言語化された場合は、“情動を言語化することにより、多様な感情を認知する能力”が高いと考えられ、情動認識力得点が高くなった。

②エモーショナル・インテリジェンス (Emotional Intelligence: EI)

Schutte et al. (1998)のエモーショナル・インテリジェンス尺度33項目を使用した。Salovey & Mayer (1990)のエモーショナル・インテリジェンス概念のうち、情動の評価と表現に関する項目が13項目、情動の制御に関する項目が10項目、情動の利用に関する項目が10項目である。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5件法で回答してもらった。

③共感性 (Empathy: EMP)

共感性を測定する尺度には、認知的な側面を重視するものと、感情的な側面を重視するものがある。本研究ではDavis (1983)の対人反応指標のうち、認知的な側面を測定する「観点取得尺度」7項目と感情的な側面を測定する「共感的関心尺度」7項目からなるPT-EC尺度全14項目(宮城, 1990)を使用した。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5件法で回答してもらった。

結 果

基礎データの分析

①情動認識力

テスト項目1から項目4までの平均と標準偏差を表1に示した。項目間の平均値の差を一要因の分散分析で検討したところ、1%水準で有意であった($F(3, 568) = 31.451, p < .01$)。Scheffeの多重比較によると、項目2が他の3つの項目に比べ5%水準で有意に平均値が低く、項目4と項目1は項目3に比べ5%水準で有意に平均値が低かった。4つの項目は情動認識力という一つの特性を測定しつつも、各下位尺度の平均と分散が異なることを許容した弱同族測定がなされていると言える。信頼性係数を計算したところ、0.815であった。情動認識力テストの信頼性は高いと言える。

②エモーショナル・インテリジェンス

EI尺度の信頼性係数 α は、0.840と高かった。

表1

「情動認識力」テストの平均値と標準偏差 (N=143)

	項目1	項目2	項目3	項目4
平均値	3.031	2.178	3.923	2.829
標準偏差	1.429	1.199	1.954	1.463

EI尺度はエモーショナル・インテリジェンスの3つの側面を測定しているため、抽出基準を3因子にして、主因子法・バリマックス回転による探索的因子分析を行ったところ、第1因子には情動の評価と表現に関する10項目が見られ、第2、第3因子には情動の制御と情動の利用に関する項目が混ざって抽出された。そこで抽出基準を2因子にし、第1因子の13項目を情動の認知、第2因子の20項目を、情動の処理とした。

次に第1因子で因子負荷が0.4未満の3項目、両因子に因子負荷が高かった1項目を削除し、第2因子で因子負荷が0.4未満の10項目、内容が抽象的な1項目を削除し、18項目からなる尺度を構成した。再度因子分析を行ったところ、固有値1.0以上の4因子が抽出された。情動の認知が第1因

子と第2因子に分かれ、情動の処理が第3因子と第4因子に分かれた。因子負荷が0.4未満の3項目、内容が適合しない1項目を削除した結果、14項目が残った。

第1因子は、他者の顔の表情や声の調子から他者の情動を認知する項目からなり、感覚的鋭敏さと名づけられた。第2因子は、他者が送る非言語的なメッセージの理解、他者とのコミュニケーション状況の理解、他者の感情の原因を推測する項目からなり、文脈察知と名づけられた。第3因子は、自己の感情変化によって新しい可能性に気づくこと、ポジティブな感情状態をつくることに関する項目からなり、感情調節と名づけられた。第4因子は、障害を乗り越えたり、課題を成し遂げようとする項目からなり、動機づけと名づけられた(表2参照)。各因子を構成する項目の合計点を尺度得点とした。

③共感性

PT-EC尺度の信頼性係数 α は、0.685でやや低かった。

PT-EC尺度は共感性の認知的側面と感情的側面を測定する項目からなっているため、2因子を抽出基準にして、主因子法・バリマックス回転による探索的因子分析を行った。第1因子には観点取得の7項目と共感的関心の1項目が見られ、第2因子には共感的関心の6項目が見られた(表3参照)。

因子負荷が0.3未満の3項目を削除し、6項目からなる第1因子を観点取得、5項目からなる第2因子を共感的関心とした。各因子を構成する項目の合計点を尺度得点とした。

共分散構造分析

情動の認識力(AE)は4項目により測定された。潜在変数(構成概念)をAE、観測変数(下位尺度)をAE1, AE2, AE3, AE4と表す。エモーショナル・インテリジェンス(EI)は4尺度により測定された。観測変数をCE1, CE2, PE1, PE2と表す。観測変数CE1, CE2の背後には情動の認知(cognition of emotions: CE)という潜在変数が

表2 EI尺度の因子分析結果（主因子法・バリマックス回転後）

項目	I	II	III	IV
顔の表情を見ることで、私は人が経験している感情を見分ける。	.784	.105	-.012	.052
私は人の声の調子で、その人がどのように感じているかを言うことができる。	.590	.412	-.094	.274
私は他者が何を感じているか、彼らを見るだけで分かる。	.571	.405	-.045	-.007
私は他者が送る非言語的なメッセージに気づく。	.290	.663	.050	.112
私は他者の非言語的なメッセージを理解することは難しいと思う。	.122	.563	.177	.079
私は人に自分の個人的な問題をいつ話すべきかが分かる。	.275	.450	.270	-.022
私はどうして人がそのように感じるのか理解するのが難しい。	.234	.418	.225	.081
私は自分の気分が変わるとき、新しい可能性に気がつく。	.114	.062	.582	.048
私はやろうと思うことは、だいたいうまくやれるだろうと思っている。	.014	.216	.572	.139
*私は一つの挑戦だと思うことに直面したとき、失敗するだろうと思ってあきらめる。	-.095	.139	.562	.168
私は私を幸せにする活動を探し出す。	.001	.023	.504	.245
私は障害に直面したときは、同じような障害に直面してそれを乗り越えたときのことを思い出す。	.123	-.073	.113	.656
私は良い気分を利用して、障害に直面しながらもがんばり続ける。	-.119	.152	.272	.645
私は引き受ける課題に対して良い結果を想像することで自分自身のやる気を出させる。	.132	-.014	.296	.527
固有値	4.517	2.368	1.508	1.140
累積寄与率	25.1	38.3	46.6	53.0

*反転項目を表す

表3 PT-EC尺度の因子分析結果（主因子法・バリマックス回転後）

項目	I	II
友達から見たら、物事がどう見えるか想像して、友達を理解しようとする。	.704	.114
人に混乱させられたときは、しばらくの間その人の立場に立ってみようとする。	.570	.166
誰かを批判する前に、自分が批判される立場だったらどう感じるか想像しようとする。	.378	.282
すべての問題には二つの側面があるので、両方を見ようと心がけている。	.342	.073
*もし自分が正しいと確信がもてるなら、他者の意見を聞くのに時間を浪費することはしない。	.322	.157
決定を下す前には、すべての人の不一致点を見ようとする。	.310	-.126
*相手の視点で物事を見るのは難しい。	.285	.212
私は気の優しい人間だと思う。	.274	.228
不運な人を見ると、親切な気持ちが起り、気にかかる。	.210	.582
*困っている人を見ても、気の毒に思わないときがある。	-.051	.580
利用されている人を見ると、かばってあげたくなる。	.309	.457
*他人が不幸に見舞われたとき、それによって心がかき乱されることはない。	.162	.329
*不公平に扱われている人を見たとき、あまりかわいそうだとは思わない。	.038	.308
私はしょっちゅう物事に感動する。	.043	.206
固有値	2.974	1.468
累積寄与率	21.2	31.7

*反転項目を表す

仮定され、PE1, PE2の背後には情動の処理 (processing of emotions: PE)という潜在変数が仮定された。共感性 (EMP) は2尺度により測定された。潜在変数をEMP, 観測変数をPT, ECと表す。

概念的には、情動認識力がエモーショナル・インテリジェンスを規定し、エモーショナル・インテリジェンスが共感性を規定するが、エモーショナル・インテリジェンスを情動の認知と情動の処理という二つの潜在変数に分けて考えると、情動認識力からの影響力に違いが見られることが予想された。なぜなら情動認識力は、情動を言語化することによって情動を認知する能力であるのに対し、情動の認知は感覚的な鋭敏さや非言語的コミュニケーションを理解する能力で、言語化というプロセスを必要としないからである。情動の処理は、感情を調節したり、動機づけを保つ能力で、より意識的な心的プロセスと考えられ、情動の言語化を必要としていることが推測される。そこで、情動認識力から情動の認知への影響指標をみるモ

デルと情動認識力から情動の処理への影響指標をみるモデルを立て、両者を比較することにした。EQSの5.1 versionを使用して、分析した。結果を図1と図2に示す。図1は、情動認識力、情動の認知、共感性の因果モデルである。潜在変数から観測変数への影響指標はいずれも高く、測定状況は良好であった。適合度指標もGFIが0.945で0.9以上の基準を満たしており、データとモデルの適合度は良いと言える。潜在変数間の関係は、情動認識力から情動の認知への影響指標は有意ではなく、情動の認知から共感性への影響指標は1%水準で有意であった。

図2は、情動認識力、情動の処理、共感性の因果モデルである。潜在変数から観測変数への影響指標はいずれも高く、測定状況は良好であった。適合度指標もGFIが0.955と高く、データとモデルの適合度は良いと言える。潜在変数間の関係は、情動認識力から情動の処理、情動の処理から共感性への影響指標がいずれも5%水準で有意であった。

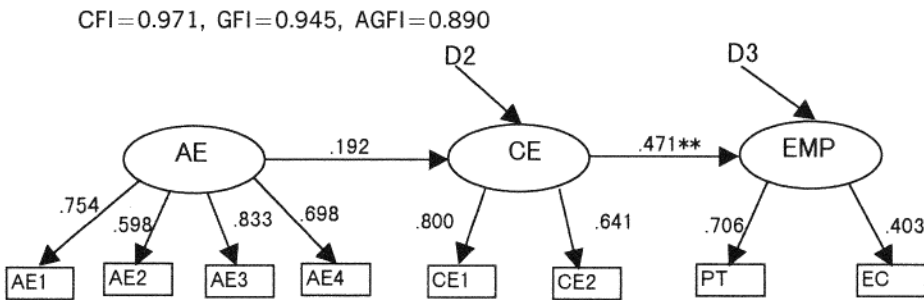


図1 情動認識力、情動の認知、共感性の因果モデル

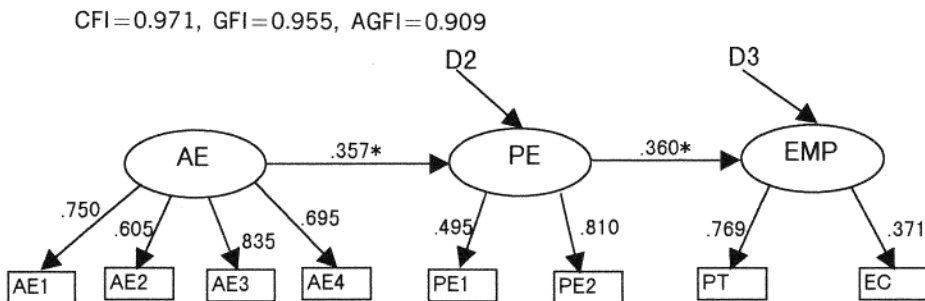


図2 情動認識力、情動の処理、共感性の因果モデル

考 察

情動認識力テストの結果では、項目2のB君の気持ちの記述得点が低く、項目3の好きな人に対する気持ちの記述得点が高かった。被験者が大学生女子であったので、男の子の気持ちを推測する課題は難しかったと思われる。また、好きな人に対する気持ちは、嫌いな人に対する気持ちよりもポジティブな内容が多く、記述するのに抵抗が少なかったと思われる。また、好きな人の方が本人にとって重要な意味を持っているので、より良く認識しているものと推測される。項目間に難易度の違いは見られたが、テストの信頼性は高かった。

エモーショナル・インテリジェンス尺度は最終的に4因子が抽出されたが、第1因子と第2因子はSalovey & Mayer(1990)の概念の情動の評価と表現に対応し、第3因子と第4因子は主に情動の利用に対応していた。情動の制御と情動の利用は最初の因子分析で識別することができなかったが、概念的にも関連が強いと思われる。感情をポジティブに保つことと、ポジティブな感情を利用して課題を解決することは連続しており、両者を独立した因子と考えることはできないかもしれない。本研究では、両者をまとめて情動の処理因子とした。情動の評価と表現すなわち情動を認知することとは独立した因子として、感情という情報をうまく処理する能力があることが示されたと言えよう。今後もデータを積み重ねて、この2因子によるエモーショナル・インテリジェンス概念の、弁別的・収束的妥当性について検討する必要がある。

最後に、共分散構造分析による因果モデルによって明らかにされたことをまとめる。情動を言語化することにより多様な感情を認知することは、自己の感情をポジティブなものに調節したり、課題に対する動機づけを保つことに影響を与えていた。また、他者の感情に対する感覚的な敏感さや他者との非言語的コミュニケーションにおける文脈の察知力、感情をポジティブに保ち、動機づけを維持する能力は、日常生活で他者の視点を採用することや他者に対して思いやり・同情・心配と

いった感情を経験することに影響を与えていることが示された。

本研究では、情動認識力がエモーショナル・インテリジェンスのどの側面に影響を与えているかを示し、共感性を規定する一つの要因としてエモーショナル・インテリジェンスがあることを示唆することができたと言えよう。

引用文献

- Davies, M., Stankov, L., & Roberts, R.D. 1998. Emotional Intelligence: In Search of an Elusive Construct. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**(4), 989-1015.
- Davis, M.H. 1983 Measuring Individual Differences in Empathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- Gardner, H. 1983 *Frames of Mind*. New York: Basic Books.
- Gendlin, E.T., 1962 *Experiencing and the Creation of Meaning. A philosophical and psychological approach to the subjective*. New York: The Free Press Glencoe.
- Gendlin, E., T., John Beebe III, James Cassens, Marjorie Klein, and Mark Oberlander 1968 Focusing Ability in Psychotherapy, Personality, and Creativity. *Research in PSYCHOTHERAPY* VIII, 217-241.
- Goleman, D. 1995 *Emotional Intelligence: Why it can matter more than IQ*. Bantam Books, New York.
- イザードC.E. 莊巖舜哉 (監訳) 比較発達研究会 (訳) 1996 感情心理学 ナカニシヤ出版 (Izard, C.E. 1991 *The Psychology of Emotions*. Plenum Press, New York)
- Lane, R.D. & Schwartz, G.E. 1987 Levels of Emotional Awareness: A Cognitive-Developmental Theory and Its Application to Psychopathology. *American Journal of Psychiatry*, **144**, 133-143.

Mayer, J.D., Dipaolo, M., & Salovey, P. 1990 Perceiving Affective Content in Ambiguous Visual Stimuli: A Component of Emotional Intelligence. *Journal of Personality Assessment*, **54(3&4)**, 772-781.

宮城真理 1990 PT-EC尺度の検討 立教大学心理学科卒業論文

Salovey, P. & Mayer, J. D. 1990 Emotional Intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, **9(3)**, 185-211.

Schutte, N.S., Malouff, J.M., Hall, L.E., Haggerty, D.J., Cooper, J.T., Golden, C.J., and Dornheim, L. 1998 Development and validation of a measure of emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*, **25**, 167-177.

Sternberg, R. J. & Kaufman, J. C. 1998 Human Abilities. *Annual Reviews of Psychology*, **49**, 479-502.

山鳥重 1994 情動の神経心理学 伊藤正男・梅本守・山鳥重・小野武年・往住彰文・池田謙一 岩波講座認知科学 6 情動 岩波書店 Pp. 36-69.

付録 1

A子さんは高校の同級生で仲の良かったB君と同じ大学を受験しましたが、A子さんだけが受かって、B君は落ちてしまいました。その後二人は気まずくなり、しばらく会いませんでしたが、半年ぶりにAさんがB君に連絡して、二人で飲みに行きました。AさんはB君を励まそうと思っていましたが、久しぶりに会ったB君は家族に病人がいて家事をしなければならず、受験勉強どころではないと訴えました。AさんはB君のことが好きだと告白しましたが、B君は他に好きな人がいる、Aさんとは今まで通りの友達づきあいをしたいと言いました。